



日本遺産『鬼が仏になった里「くにさき」』の取組 ～日本遺産と温泉をめぐる～

松本 卓也¹⁾

(令和 4 年 11 月 5 日受付, 令和 4 年 12 月 9 日受理)

The policies of Kunisaki — where oni and Buddhas coexist as one.
～About Japan Heritage and hot springs～

Takuya MATSUMOTO¹⁾

1. はじめに

「文化財は活用の時代」と言われるようになってから久しい。特に文化財単体で保存活用をしてきた従来の方法から、地域の様々な要素と文化財を掛け合わせ、地域全体で文化財を継承しつつ、観光や地域活性化など広い文脈で活用を行う場合が増えてきた。そのシンボルの 1 つとして、2015 年から認定が開始された日本遺産の取組が挙げられる。

一方、温泉に関しては、2017 年に草津温泉の「湯畑」が名勝に指定されたことが記憶に新しく、大分県内でも「別府明礬温泉の湯の花製造技術 (2006 年に重要無形民俗文化財指定)」「別府の地獄 (2009 年に名勝指定)」「別府の湯けむり・温泉地景観 (2012 年に重要文化的景観選定)」など、大分県では別府市を中心に温泉に関する文化財も増え、温泉を日本文化として捉えなおす機運が高まっている。

大分県豊後高田市・国東市では、日本遺産『鬼が仏になった里「くにさき」』に、温泉の構成文化財を持ち、仏教文化と一緒に活用することを目指してきた。今回は、日本遺産における温泉の位置付けについて報告を機にまとめた内容と、日本遺産くにさきが温泉をどのように活用することを考えているかを報告したい。

2. 日本遺産と温泉

日本遺産は、文化庁が 2015 年より創設した文化財活用に主眼を置いた認定制度である。2020 年

¹⁾ 豊後高田市教育委員会 文化財室 学芸員. ¹⁾ Bungotakada-City Board of Education Cultural, Curator.

までの6年間で、約20件ずつの認定を行っており、2022年現在では104件の認定地域があり、各地域が日本遺産による文化財活用の施策に取り組んでいる。

日本遺産の特徴は、地域の文化財を直接認定するのではなく、地域の文化財や伝統文化についてまとめた「ストーリー（物語）」を認定する部分にある。日本遺産ストーリーには、希少性や地域性、面白みや斬新さが求められ、地域に点在する文化財を構成文化財として位置づけて、ストーリーで繋ぎながら紹介することになる。

また、地域活性化計画と呼ばれるマスタープランも、ストーリーと一緒に提出することを求められ、文化観光の施策を中心に、文化財やストーリーを活用の方向性も評価の対象となっている。その後も有識者からなる日本遺産審査・評価委員会による継続的なフォローが実施されている。

日本遺産のもう1つの特徴に、未指定文化財を構成文化財に組み込むことができることが挙げられる。地域文化を語るストーリーを構成しうる要素の中には、様々な事情で直ちに文化財に指定することができないものがある。

中でも関連する物件や景観の文化的要素の指定が進むものの本体は液体である「温泉」や、地域に広く浸透しているものの様々にアレンジされる「食文化」については、特に観光方面の施策においては必須の要素だけに、日本遺産ストーリーの構成文化財として組み込むことで、地域の中で新しい立ち位置を確立し、文化資源としてのブランディングが可能になる。

しかし、各々の地域が「温泉」や「食文化」について、どの程度構成文化財に組み込んでいるかを示す資料は無かったため、本稿で改めて確認をしてみた。日本遺産ポータルサイト (<https://japan-heritage.bunka.go.jp/ja/>) における各地域の構成文化財の情報を総覧し、「温泉」「食文化」に関する構成文化財をピックアップした。

その結果、「温泉」は8件のストーリーで構成文化財となっており、「食文化」は51件のストーリーで構成文化財となっていることが分かった。温泉やその関連遺産を構成文化財にしている地域は意外にも少なかったため、全て見てみると以下の通りとなる。

- ①^{みさき}三朝温泉（未指定（種別なし）・鳥取県三朝町『六根清浄と六感治癒の地 ～日本一危ない国宝鑑賞と世界屈指のラドン泉～』）
- ②^{すいた}次田温泉（二日市温泉）（未指定無形文化財・福岡県太宰府市等『古代日本の「西の都」 ～東アジアとの交流拠点～』）
- ③^{どろがわ}洞川温泉街（未指定（伝統的建造物群）・奈良県天川村『森に生まれ、森を育んだ人々の暮らしたところ ～美林連なる造林発祥の地“吉野”～』）
- ④^{またまゆはら}真玉湯原温泉・赤根温泉（未指定（種別なし）・大分県豊後高田市・国東市『鬼が仏になった里「くにさき」』）
- ⑤^{ゆのつ}温泉津町重伝建保存地区（重要伝統的建造物群保存地区・島根県大田市『神々や鬼たちが躍動する神話の世界 ～石見地域で伝承される神楽～』）
- ⑥^{ゆがうつ}湯川内温泉・入来温泉・諏訪温泉（未指定（種別なし）・鹿児島県出水市及び薩摩川内市『薩摩の武士が生きた町 ～武家屋敷群「麓」を歩く～』）
- ⑦^{たけのぼり}別所温泉の岳の幟行事（国選択無形民俗文化財・長野県上田市『レイラインがつなぐ「太陽と大地の聖地」 ～龍と生きる町 信州上田・塩田平～』）
- ⑧^{さんべ}三瓶温泉（未指定（種別なし）・島根県大田市『石見の火山が伝える悠久の歴史 ～“縄文の森” “銀の山” と出逢える旅へ～』）

温泉自体を対象としている場合が最も多いが、文化財の種別が一定でなく、種別を書きこんでい

ない協議会もある。洞川温泉街や温泉津町重伝建保存地区など、温泉街の町並みを構成文化財にしている地域や、別所温泉の岳の轡行事を温泉に関する伝統行事を無形民俗文化財として構成文化財にしている例もあった。

「食文化」に関する構成文化財は約半数のストーリーが採用しており、多くの地域で活用されているが、「温泉」に関しては、構成文化財に採用している地域は少ないという傾向が分かった(勿論、日本遺産を観光施策に活かす際に、温泉を活用している地域自体はもっと多いように思われる)。

この理由について考えると、恐らく未指定の温泉関連遺産を日本遺産の構成文化財に挙げることのハードルが、「食文化」と比べると高かったのではないかと思われる。

食文化は無形文化財もしくは無形民俗文化財として、多くの人を介して利用できるものなのに対して、温泉は本体を液体(天然記念物)と捉えても、それに加えて温泉地(場)としての名勝・天然記念物・伝統的建造物群等の文化財とする場合、所有者や範囲を設定することが必要となってくる為である。

温泉を地域文化の一端と捉え、積極的に他の地域資源と関係させて活かしていくためには、地域々々の実情にあわせた取組の経過を見て考える必要があるであろう。

3. 日本遺産 鬼が仏になった里「くにさき」と温泉

本節では、手前味噌にはなるが、温泉を構成文化財とする日本遺産ストーリーの例として、大分県豊後高田市・国東市の『鬼が仏になった里「くにさき」』のストーリーと構成文化財「真玉湯原の温泉」の関連について説明したい。

日本遺産『鬼が仏になった里「くにさき」』は、平成30年5月に認定され、豊後高田市の天念寺などで実施される国東半島最大の法会「修正鬼会」に登場する人々に幸せを届ける鬼にまつわるストーリーである。真玉湯原の温泉との関連性が分かるように要旨を説明すると以下ようになる。

国東半島は、差別侵食された火山性の角礫凝灰岩の岩峰群が至る所に形成され、古代より仏教の修行場と認識されるようになっていった。神や仏、そして鬼を見出した僧侶たちは、岩峰の各所に霊場をつくり、9世紀には国東半島の峯々の霊場を巡る「峯入り」が創始され、現在に至るまで継承されている。自然の威力から感じられる神と仏が融合した国東半島は神仏習合のはじまりの地であるとしばしば説明されている。平安時代には、国東半島の岩峰の麓には、多くの天台宗寺院が展開するようになっており、これらを六郷山、または六郷満山と呼んでいる。

六郷満山の寺院には、かつて修正鬼会を行っていた時の鬼面が残されている。修正鬼会で暴れ回る荒鬼・災払鬼・鎮鬼に加え、それらの鬼を呼び出す舞をする鈴鬼も鬼の一種であるが、これらの鬼を合わせると国東半島には100を超える鬼面が残されている。これらの鬼は里人に五穀豊穡・無病息災などのご利益をもたらす良い鬼であり、里人から大いに歓迎される存在である。

この鬼は仏の化身とされており、中でも不動明王が身を変えた姿と説明されることが多い。不動明王は密教では特に大切にされた仏様で、六郷満山でもほとんどの寺院で厚く信仰されている。国東半島の不動明王はバリエーションが豊富で、少し膨れたユニークな顔をした熊野磨崖仏や、国東半島の自然の神で童子の姿をしているが、不動明王の化身とされる「太郎天」など様々あり、六郷満山の信仰の奥深さに触れることができる。



天念寺修正鬼会



修正鬼会 加持の様子



峯入り (天念寺耶馬)



熊野磨崖仏



木造太郎天像



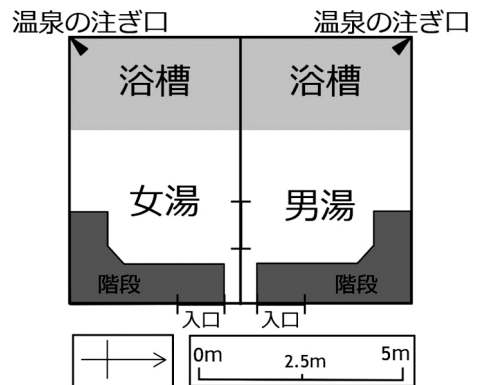
たし水のしょう
田染莊小崎の農村景観

一方の真玉湯原の温泉は、真玉温泉（スパランド真玉）から500メートルほど西側に所在する温泉で、現在は公衆浴場としての役目を終えているが、昔ながらの温泉利用の様子を伝えるエリアである。

公衆浴場跡は、縦に掘り込んで浴室をつくっており、四方はコンクリートで塗り固められている。奥側にある浴槽は浴室より更に一段低く掘り込んであり、浴槽側の角の位置に温泉の口が設けられている。浴室は中心で男湯・女湯の仕切りがなされており、男女に分かれた入口から階段を下って浴室にいたる構造をしている。



真玉湯原の温泉 公衆浴場跡



公衆浴場跡の略図

真玉湯原の温泉に関する資料として、『真玉温泉ノ記¹⁾』『新湯原温泉ノ記²⁾』が知られている。

¹⁾ 真玉湯原の温泉の湯桁を再興した井ノ口季光の子孫とされる井ノ口家に伝わる史料。

²⁾ 新湯原温泉ノ記は現物を確認できないため、『西国東郡誌』に掲載されている積文を参照した。

『真玉温泉ノ記』は、江戸時代中期(享保年間)の温泉再興の記録で、江戸時代前期(慶安年間)に水害で流れた湯桁を享保3(1718)年頃に、地元の井ノ口末光が私財を擲って再興したという内容である。それ以前の伝承等に関する記載も多く、日本遺産ストーリーに登場した「太郎天」が産湯に温泉を利用したという伝承や、延文3(1358)年に、真玉重實^{またましげざね}という人物が神夢によって、温泉に石畳と双池の浴室を作って入浴し、霊泉の効果で心身が軽快になったという話が記載されている。

この話に関連して、現在の公衆浴場の近くには、薬師如来の石仏を安置する大型の石殿があり、宝永2(1705)年の紀年銘と願主は井ノ口季光となっている。「末」は「季」と音が通じており同一人物であると思われる。

この薬師如来の石仏が真玉湯原の温泉と関連することを示すのは、石殿の天井に書かれた記載による。文字の上側には、まじないの文字「月」「星」「日」が書かれ、「古日当所温湯/六郷山惣鎮守屋山/太郎天童可為/御手洗略記之」と記載されており、太郎天が産湯に使ったことが示されている。「古日」に温泉があったことを記載しており、この石仏が作られた段階では温泉は再興されていなかったことも分かり、『真玉温泉ノ記』の内容にも合致している。

『新湯原温泉ノ記』は、明治17(1884)年に、渡邊逸策という人物が、真玉湯原の温泉の湯桁が1つで不便であるため、新しい湯桁を作ったという内容である。新しい湯桁には頭が病める人のために、樋を伝って川岸から2筋の“湯の瀧”を作ったとされている。

真玉湯原の温泉は南北朝時代には知られ、公衆浴場跡は概ね江戸時代には湯桁として使われていた場所がある程度は踏襲していると考えられる。



湯原の薬師如来石殿



石殿天井の銘文

また、地元の方への聞き取りによれば、現在の真玉湯原の温泉は、川沿いのブッシュの中に源泉を引くポンプがあり、公衆浴場や集落の各家庭に温泉が引けるようになっていているという。利用の様子を見せていただくと、屋外に設けられた手洗い場には湯の花が多く付着していた。湯自体はあまり高い温度ではないが、冬になれば水路の部分だけ雪が解け、湯も冷たくないとのことであった。

4. 日本遺産『鬼が仏になった里「くにさき」』の取組

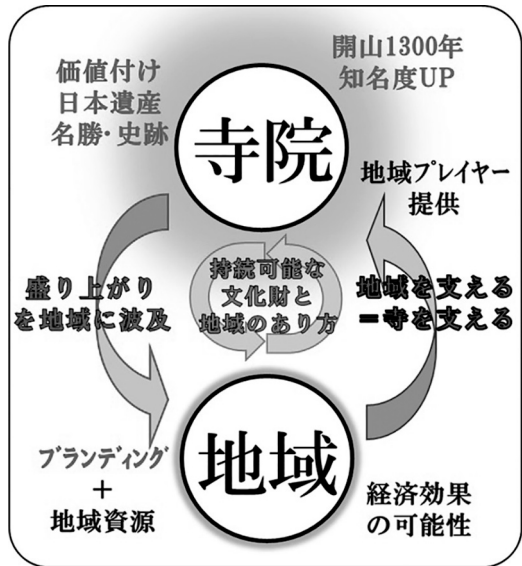
日本遺産『鬼が仏になった里「くにさき」』では、国東半島の各谷に点在する六郷満山寺院と鬼文化、修行^{みねいり}「峯入り」に関連する景観・文化をメインの構成文化財としているが、これらの文化財

は存続の危機に瀕しているものも多い。

くにさきらしい美しく歴史ある風土を守っていく際、近代化や大規模開発に対する抑制する従来のやり方だけでは十分でなく、「文化財を持つ小さな地域」には過疎や縮小がもたらす担い手不足や荒廃を如何に解消するか問題となっている。日本遺産くにさきでは、「文化財を持つ小さな地域」を「谷」を使ってゾーニングし、それぞれのエリアの特徴や文化財を使った地域づくりを行っている。基本構造としては、六郷満山寺院（文化財）と地域が共に支えあう構造をつくるのが大切だと考えており、文化財の活用を通して地域を活性化し、逆に地域が文化財を継承する取組をするという循環を目指している。



日本遺産くにさきの取組のゾーニング³



寺院と地域の相互作用



谷毎の文化資源などをあしらったエンブレムは、文化財と地域活動の協働を示す目印

³ 地図上の番号は、①香々地谷 ②真玉谷 ③長岩屋谷 ④都甲谷 ⑤田染荘 ⑥国見谷 ⑦来浦谷 ⑧富来谷 ⑨国東谷 ⑩武蔵谷 ⑪両子谷に対応している。

日本遺産くにさきの地域計画では、地域の目指すべき Vision (20年後の姿) を3つ立て、それを達成するための取組を計画立てて実施している。3つの Vision は以下の通り。

- Vision1 日本遺産を活用した観光の受入態勢がくにさき DMO を中心に確立しており、各寺院や拠点で「くにさきの鬼」の文化に触れることができる。
- Vision2 国内の人々が、里に幸せを届ける「くにさきの鬼」を知っている。
“ONI (not DEMON)” という言葉が世界に羽ばたいている。
- Vision3 くにさきに展開する鬼の文化を素材に、豊後高田・国東市の交流が密になり、民間・行政がたすけあい、エリア全体が持続可能な社会として、未来に引き継がれる準備ができている。

具体的な施策の内容に触れると、まずはストーリーの普及啓発を行うために、ストーリーをより平易な言葉でまとめた多言語(英・仏)のストーリーブック『くにさきの鬼』を刊行・データ公開し、小中学生や海外の方にもストーリーに親んでもらえるように整備をした。発信のプラットフォームは特設ホームページ (<https://www.onie.jp/>) を活用し、地域のプロジェクトを推進するためのクラウドファンディング決済機能を搭載している。

次に観光振興について、文化資源を活用することで、より高付加価値な体験プログラムを構築するべく、ヘルスツーリズムの一種であるリトリートツーリズムに着目をしている。リトリートは「避難」「避難所」などと訳され、日常から離れた場所で心身をリセットさせる「転地療法」を目的に取り入れた旅行のことで、国東半島の豊富な自然資源・文化資源を体験に取り入れることで、リトリートの旅行先としての魅力を高める取組をしている。例えば、国東半島峯道ロングトレイルを中心にした旅行コースに、座禅や写経を組み合わせたり、体験用の修行僧の衣装を整備したりして付加価値を高め、食については、地域ならではの食材を加えたり、食事シーンの演出を行ったりする。このリトリートツーリズムに関して、温泉は重要な立ち位置にあり、体験プログラムの一部として組み込むなど、6つの温泉施設を持つ豊後高田市の強みを活かした観光づくりを行っている。

温泉を活かした具体的な地域づくりの取組として、別府大学の学生と夷谷温泉のPRを考える共同研究を行った。別府大学国際経営学部の中山昭則先生の自主ゼミの学生による研究で、夷地区(香々地谷)の観光の拠点を夷谷温泉と定めて、お土産品の開発として夷地区の名所が描かれたオリジナルタオルの製作や、郷土料理「ひねり餅」のアレンジなどに取り組んでいただいた。オリジナルタオルは、夷谷温泉で販売中となっている。

これらの調査や取組をベースに、豊後高田市教



ストーリーブック『くにさきの鬼』



学生が制作したオリジナルタオル

育委員会では、令和4年3月に『名勝 中山仙境（夷谷）保存活用計画』の活用部分で、中山仙境（夷谷）を含む夷地区全体の地域活性化の基本方針を定め、上記の観光施策や温泉利用について、行政的な指針にも位置付けている。

今後は、地域毎の特性を活かした体験プログラムを作成し、国東半島の魅力あるツアーを造成していく予定にしており、温泉も含めた地域の魅力を如何に発信していくかが重要になってくると考えている。

文化財を持つ小さな地域の自走・自立や、地域の目指すべき Vision の達成のために、日本遺産くにさきは、これからも様々な文化財活用に挑戦していきたい。

○参考文献・参考ホームページ

西国東郡編『西国東郡誌』（1923年）

豊後高田市『名勝 中山仙境（夷谷）保存活用計画』（2022年）

真玉町誌刊行会編『真玉町誌』（1978年）

六郷満山日本遺産推進協議会『鬼が仏になった里「くにさき」』（2018年）

文化庁「日本遺産ポータルサイト」(URL : <https://japan-heritage.bunka.go.jp/>) , 2022年7月12日
閲覧

六郷満山日本遺産推進協議会「鬼が仏になった里「くにさき」」(URL : <https://www.onie.jp>) , 2022年10月22日閲覧